

蘇芳集



日 焼

高橋 さえ子

土 用

青山 丈

連休の亀ぼつねんとして鳴かず

さくら薬降る足もとの暮れかかり

懐郷やそらまめあをく茹であがり

蟻蝶のもやもや樹下の雨あがる

夏落葉堰の飛沫の盛りあがり

西郷像仰ぎ母校へ白日傘

恙ややわづかなる歩の日焼かな

昼顔に雀行つたり来たりかな

昼顔や昨日の今もこの辺り

少し潜つて青梅に手が届く

一面の十葉拝みたくなりぬ

十葉の日蔭に並ぶ日向かな

ひとり来てすぐ紫陽花に塗れけり

土用三郎老人が届けられ

梅雨山河 野路芥子

思ふ存分なのであらうよ夏落葉
梅雨山河しつかり者の蝶となる
遅れ着く雀のどれも羽抜鳥
怖きとも怖くなきとも雷鳴を
大きな傘さして雨降る七夕は
ざわざわと雨が洗つて新松子
パンダ見にゆきたし暑さ見舞ひたし

桜 富田正吉

ひとの世やさくらは白し飯白し
八重桜笑ひ泳へてゐるやうな
理髪師が唇の傷いふ四月馬鹿
桜葉降る日や頭よく振る日
行き暮れてあしたは虚子の忌なりけり
生き抜きしあとに逝くなり鳥雲に(悼市川榮次)
晩年に色ありとせば紫木蓮

紅より勁き 木内憲子

薔薇咲きぬ紅より勁き白といふ
花かたばみ何の取柄もなけれども
プラタナス並木涼しき数歩かな
アイスティーほどの安けさくちびるに
下闇の水音をもて詩ごころ
空梅雨の鴉が枝を啣へけり
幾たびも見し木々夏も中ほどに

午後の歩 前田陶代子

水音に遠さありける暮の春
黄菖蒲や水辺へ石の階いくつ
花いばら段差に水の蘇る
えご咲きにけり湧水の色もたず
風青し一木にある裏おもて
午後の歩の気怠しねずみもちの花
草刈つて夕べの雨の匂ふなり

新樹

八木下 末黒

一枚の障子開けおく立夏かな
雨風を立尽しけり立葵
泰山木咲くや虚空をつかむかに
晴天や夾竹桃のあたらしく
立止る菖蒲の前や濃むらさき
画架として自転車新樹の下にかな
吊橋の下やいくつか未草

阿波も奥

吉田 幸敏

大南風阿波には藍の育ちつつ
ハンカチを染める藍色縹色
新緑とジビエが馳走阿波も奥
阿波木偶の眉吊り上ぐる薄暑かな
抱く木偶に馬手の扇を使ひやる
天道の真下や農村舞台灼く
夏芝居ピアスの遣ふ木偶の足